

コロナ禍の中ASKは「アーティストファースト」で支援しています

皆さまの寄付で芸術・文化活動を支援するアーツサポート関西は、コロナ禍で多くのアーティストが活動の中止・延期に追い込まれている中において、2020年度も「アーティストファースト」の視点で、支援を行っています。

オオサカ・シオン・ウィンド・オーケストラ

Osaka Shion Wind Orchestra

公益社団法人 大阪市音楽団

日本で最も長い歴史と伝統を誇る交響吹奏楽団

2020年11月の第133回定期演奏会(ザ・シンフォニーホール)で、世界初演となる『スリー・ダンス・ミニチュアズ』(フィリップ・スパーク作曲/秋山和慶指揮)を披露したオオサカ・シオン・ウィンド・オーケストラ。「ウィンド・オーケストラ」は吹奏楽団の意味ですが、この日、Shionの繰り出す迫力あるサウンドは、まさに草原に吹く一陣の風のように聴衆の心を揺り動かしました。「トランペットやクラリネットなどの旋律を奏でるパートが多く、重厚な旋律の響きがShionの持ち味であり人気の理由」と話すのは、ホルン奏者の長谷行康さん(常務理事兼事務局長)。新型コロナウイルス感染防止対策として、入場者が制限される中、チケットは早々に完売しました。



同楽団は1923年に元陸軍軍楽隊の有志を中心に結成され、長らく「Shion(しおん)」(大阪市音楽団)の愛称で親しまれてきました。2014年に大阪市直営から民営化され、現在の名称に変更。以来、テレビ朝日『題名のない音楽会』への出演や、NHKの歌番組で演歌歌手のバックバンドを務めるなど、活躍の場を全国区へと広げてきました。全日本吹奏楽コンクールの課題曲(参考演奏)の収録も行っています。さらに、音楽監督の宮川彬良さん(作曲・編曲家)の誘いでショーの世界へ。ホテル・ハイアットリージェンシー 大阪(大阪市住之江区)のクリスマスディナーショーには、7年連続で出演しています。ここでは定期公演のクラシックとは異なり、昭和歌謡やジャズ、映画音楽など、さまざまなジャンルの曲が披露されています。



「ディナーショーなんて、公務員時代には夢にも思いませんでした。民間団体となつては集客数が収入と直結するため、自分たちで大阪市外の企業や自治体にもこつこつと営業活動を行ってきました。『大阪市音楽団』から『Shion』へと名称を変えたのも、これから大阪市以外へ活動範囲を広げ、他都市に受け入れてもらいやすくするために、「大阪市」の

イメージを取り、「Shion(しおん)」という響きを残しています。私たちにとって、お客様に喜んでいただくことが一番嬉し



長谷行康さん

い。そのためには演奏機会を増やすことが第一。こうして現在、年間150~160ステージをこなしています」と長谷さん。

実は、市音は民営化される7年ほど前から、市の財政難によって団員の新規採用をしませんでした。そのため演奏者が42人必要なところ26人にまで減少し、存続の危機にあったのです。さらに、民営化にあたり当時の団員には辛い選択が迫られました。その内容は、自主退職後給料が1/3に減っても音楽家として生きていくのか、市の職員として残るため他部署の試験を受けるのかというものです。ただしこの場合、不合格になつてもShionには移籍できないという厳しいものでした。当時の長谷さんは、人それぞれ家庭の事情があり、「伝統を守るために一緒に頑張ろう」とはいえなかったそうです。さらに「これからも良い音楽を届け続けることで、大阪市の職員として残った人たちが、自分もShionにいたという誇りを感じてもらいたい」といいます。



ところで、長谷さんが吹奏楽(ホルン)を始めたのは高校時代から。家にピアノがなかったため、大阪音楽大学の入試に備えて毎日始発電車で登校し、放課後は遅くまで音楽室のピアノで練習したそうです。同大卒業後は大阪フィルハーモニー交響楽団やザ・カレッジ・オペラハウス管弦楽団(首席奏者)などを経て、1990年に「大阪市音楽団」に入団しました。

演奏家の育成も重視しているShionでは、学校吹奏楽の指導や、一般の人に演奏技術を指導する「月イチ吹奏楽」を行い、長谷さんも毎月指導にあたっています。プロ演奏家によるこうした取り組みは他都市ではあまり例がなく、長谷さんは、こうして一人でも多くのShionファンを増やし、「将来Shionに入りたい」という人が出てきてほしいと願っています。



第133回定期演奏会(2020年11月26日/ザ・シンフォニーホール)



クリスマスディナーショーでの演奏(ハイアットリージェンシー 大阪)



「月イチ吹奏楽」で指導する長谷さん(後姿)

写真提供: 公益社団法人 大阪市音楽団

美術(岩井コスモ証券ASK支援寄金助成)

堤 拓也(キュレーター)

活動概要▶展覧会の企画開催

堤さんは、現代美術の展覧会を企画するフリーランスのキュレーターです。京都と滋賀の県境にある、若いアーティストたちの共同アトリエ「山中Suplex」で行われる展覧会のディレクターでもあり、2020年11月に、ドライブイン形式の展覧会『類比の鏡／THE ANALOGICAL MIRRORS』を企画・開催しました。

展覧会は日没から始まり、作品の鑑賞はすべて車の中から。完全時間予約制です。アトリエの画材や機材の合間に彫刻や映像作品などが展示されており、バラックのような小屋を

サファリパーク感覚で巡っていきます。展示には鑑賞者の視点への配慮がなされ、普段より集中して見ることができました。

窓をあけると周

囲の深い森から冷たい空気が感じられます。展覧会の不思議な状況に、芸術の理解に理知的な説明は不要であることを感じさせられました。



「類比の鏡／THE ANALOGICAL MIRRORS」
撮影：前谷 開

美術(岩井コスモ証券ASK支援寄金助成)

野原万里絵(現代美術)

活動概要▶ワークショップ開催や作品の制作など

野原さんの作品は、多くの人々の力を借りて制作されます。2020年11月に枚方市で行った展示では、大人や子供たちから理想の公園のイメージを募集し、アイデアを出した人たちと一緒にイメージを膨らませ、形を整え、色を足し、また会場の道具や備品なども取り込んで、空間インスタレーション作品をつくり、展示しました。

また、青森市にある国際芸術センター青森に秋から冬にかけて3か月間滞在し、地元の人々に青森の海岸で拾ってきた石を見せて絵に描いてもらい、そこから感じ取ったインス

ピレーションをもとに、野原さんが少しずつ手を加え、組み合わせを考えて、壁いっぱいに広がる大きな一つの作品として構成しました。

野原さんの作品

では、いろいろな人の想いが彼女の感動や発見となり、そこから作品が生まれます。人と人とがつながることの豊かさを、それは教えてくれます。



展示作業をする野原万里絵さん
撮影：小山田邦哉 写真提供：国際芸術センター青森

伝統芸能(一般助成)

林本 大(能楽師)

活動概要▶能の魅力伝える普及活動

能楽師の林本さんは、大学で能の魅力に触れ、世襲ではなく一般の家庭から能楽の道に入りました。

能などの伝統芸能を多くの方に知ってもらいたいと、落語、講談、文楽などの若手演者とともに若い世代向けの舞台公演を行うほか、能をわかりやすく解説する入門講座「能meets」を2019年に立ち上げ、ほぼ月1回のペースで能楽の紹介に取り組んできました。

「能meets」は、今年のコロナ禍においても精力的に行われ、主に大阪・北浜と岸和田の2つの会場を使って、能装束や小

道具をはじめ、舞や殺陣、演目の解説など、「あまり知られていないが、実は知れば知るほど能楽が面白くなる」小ネタやエピソードをふんだんに披露。

コロナで前半は活動できなかったにもかかわらず、半年間で延べ600人以上が参加し、能の奥深い魅力に多くの人々が触れることとなりました。



杉江能楽堂(岸和田市岸城町)での「能meets」

音楽(岩井コスモ証券ASK支援寄金助成)

堀江恵太(ヴァイオリン)

活動概要▶自主企画による演奏活動など

コロナ禍にもかかわらず、堀江さんは2020年、積極的に演奏活動に取り組んでいます。8月には兄のチェリストの牧生さん、妹のピアニストの詩葉さんとともに「堀江トリオ」として、ザ・シンフォニーホールが行う公式オンライン演奏会の第1回目の出演者に選ばれ、ホールの舞台から素晴らしい生演奏を披露。「堀江トリオ」としては、ABCアナウンサーで父の政生さんとともにクラシックの魅力伝えるネットラジオ番組もライブ配信中です。また、7月にはNHK・FMの若手演奏家を紹介する番組「リサイタル・パッション」にも出演しました。

感染拡大が少し落ち着いた9月からは、同世代の演奏家仲間と声をかけて企画した室内楽コンサートを数多く開催。その数は12月までの3か月間で10回にのぼります。

コロナ禍であるからこそ表現したい音楽がある——堀江さんの活動から、そんな熱い想いが伝わってきます。



演奏会の仲間とともに：左から堀江恵太さん
福岡昂大(ふくおかこうだい)さん
柳原史佳(やなぎはらあやか)さん
谷口晃基(たにぐちこうき)さん